2016.12.9

尼崎市立大庄北中学校　第３学年　社　会　科　通　信

なんでやねん

発行責任者　倉橋　忠

No.６８

過労死をうむ背景を考えよう

働き過ぎで労働者が死んでいく。**過労死**と言われる。この言葉は「karoushi」と世界で紹介されるほど、日本の産業界の特徴にもなっている。1980年代に過労死は社会問題となり、「**労働災害**」として認定されるようになって、およそ30年が過ぎる。それなのになぜ、まだ同じような事件が起きるのだろうか。

また、労働が厳しく、若者が自らの命を絶つ事件も相次いで起きている。いったいこの国の仕事ってなんだろうか。**労働基準法**って役割を果たしているのだろうか。

次に紹介する「手記」は、過労死が「労働災害」と認定されるまでに、途方もない苦労を経験した人が書いものである。じっくりと、読んで欲しい。

おとうさんへの手紙

東京都文京区　　安田　秀美（40歳）

1990年2月、環境調査会社勤務の夫が突発性心機能不全で死亡。当時40歳。

あなたは覚えているでしょうか。

長女の志歩が２歳のとき、朝出かけるあなたを見送りにでた玄関先で言いました。「おとうさん、またあそびにきてね」。戸が閉まると、「おとうさんのおうちはどこなの？」と私に聞きました。あとであなたにその話をしたら、あなたは目に涙を浮かべ、なにも言いませんでした。そのころのあなたは１カ月370時間も働いていました。あなたの勤める環境調査会社では、騒音調査は２４時間連続で、まる２日続くこともありました。そのうえ、人が不足し、大気汚染の調査も、途中から兼務することになりました。有給休暇は４年間でたった１日とれただけでした。

父親の参加の少ない家庭生活で、あなたの姿を子どもたちに感じさせたいと、おもちゃや絵本を買うにも「お父さんが一生懸命働いて買ったのだから大切に使ってね」と、ことあるごとに言い聞かせていました。あなたの姿を見たことのない人は、母子家庭だと本当に思っていたそうです。

あなたが亡くなってから１年５カ月。志歩は５歳、美佳は４歳、保育園の年長さんと年中さんになりました。３人だけになってどうやって生活をしていったらいいのか、なにも考えられず、あなたが生前残していた遺言を頼りにいったんはいなかへ

帰ったのですが、いまは都内で男子寮の寮母として住みこみで働いています。子どもたちに淋しい思いはさせたくなかったため、そして私自身不眠症になり、薬に頼る生活をしたくなかったため、日中働いてクタクタになる仕事を選んだのです。

子どもたちは成長するとともに、あなたのことはほとんど記憶に残らなくなっていくようです。それでなくても家ですごすことはあまりありませんでしたから、あなたの印象は薄いのかもしれません。いまでも、あなたのいない生活のなかで淋しくはないようです。

子どもたちのあなたへの手紙です。一生懸命考えていました。読んでくださいね。

おとうさん、やさしかったね。おとうさんありがとう。やさしいおとうさんだったね。あそんでくれてありがとう。ほんよんでくれてありがとう。だっこしてくれてありがとう。かたぐるまもね。おもちゃかってくれてありがとう。

でも、もっとおもちゃかってほしかった。おふろでいっしょにあそんでほしかった。もっとだっこしてほしかった。こうえんとかいろんなところにつれていってほしかったなあ。　　みか

おとうさん、げんきですか、しほはいまほいくえんにいっています。おともだちもたくさんできました。せんせいはやさしいです。おともだちとなかよくあそんでいます。

ははのひにはおかあさんのえをかきました。ちちのひにもおとうさんがいないからおかあさんのえをかきました。ほじょなしのじてんしゃにものれるようになりました。とってもはやくのれるよ。うーんとうれしかったよ。

おうちでは、おにいちゃんたちがだっこもかたぐるまもしてくれるよ。じてんしゃのりのれんしゅうもてつだってくれたよ。

おとうさんのゆめをみたよ。おとうさんとおかあさんとみかちゃんとしほとうたをうたったんだよ。たのしかったよ。

あのね。おとうさんしんでね、おかあさんがいっぱいないたの。しくしくってね。それでね、おかあさんに「もうおとうさんはしんでしまったんだからあきらめなさい。そんなになくとおにいちゃんたちにきらわれるよ」っていったの。でもね、おかあさんまだなくんだよ。ときどき。「もうやめなさい」ってね、いうの。それからね、「おとうさんのことはおぼえていてもいいからもうぜったいなくのやめなさい」ってね。

おとうさんなんでしんだんだろうね。はたらいてつかれたの？　きっとつかれてしんだんだよ。おかあさん。

あのね、しほね、おとうさんがほしいの。しゃしんにうつっているおとうさんほしい。

おとうさんがいきていたらね、いっしょにあそぶの。やさしいおとうさんだったからね、やさしくしてもらうの。「おとうさん」っていっちゃうの。それからいっぱいいろいろなところにいくの。それからいっしょにおえかきするの。それでね、おとうさんのえをかくの。

おとうさん、げんきでね。さようなら。　　しほ

お父さん、子どもたちの声が届きましたか？

あなたが仕事をしていたころ、毎晩（朝）帰宅の遅いのに私が心配して、転職をすすめたことがありました。会社をやめてほしいと何度も言いましたね。でも、家族のためにこれだけの仕事をしているのだ、社会的責任もあるのだと、そして私が自分の気持ちを理解してくれないと、あなたは言いました。そして死んでしまった。あなたが守りたかったものはなんだったのですか。死ぬほど大切にしたかったのは、なんだったのですか。

亡くなってから、同僚の方に言われました。「子どもたちに誇れる仕事をした」と。あなたが生涯をかけてやりたかった環境保全の仕事はたしかに、だれにでもわかるほど素晴らしい仕事だと思うのです。そして真面目に努力して、コツコツと仕事をやりとげ、評価も受けた。やりたい仕事で死ねて本望ですか？　これは皮肉に聞こえるでしょうか。

日曜日の晩、前日出勤したまま帰宅しないあなたを、思いあまって迎えにいったことがありました。現われたあなたの目は血走り、目のまわりはどす黒くなっていました。帰宅のタクシーのなかでも仕事の話をブツブツ。仕事という魔物にとりつかれたかのように、仕事以外の話には耳も貸さず …。本当に、真からの仕事人間なのだと思いました。私がいくら言ってもわかってもらえないのは当然でしたね。

でも、どうしてそこまで追いつめられてしまうのでしょう。会議のたびに徹夜で資料を作り、問題があると言っては暗い表情で帰宅し。あなたの遺品となった通勤カバンのなかには副社長が書いた社報の１ページのコピーが入っていました。くり返し読んだのでしょうか。ボロボロになっていました。

子どもたちが成長したとき、なんと言ってあなたの姿を伝えたらいいのでしょう。

あなたが亡くなって、あなたがなにを考えていたのかわからなくなってしまいました。

いまでもときどき、あの朝のことを思い出します。私が起きたとき、もうあなたは寝室で、息もなく冷たくなっていました。私には、あなたに「ありがとう」も「さようなら」も言う時間すらありませんでした。

前日、１年に何回あるかというほどめずらしく子どもたちにおみやげを買って帰宅し、ヘタヘタと座りこみました。でもその後、子どもたちに、笑顔でいかにも楽しそうに本読みをし、私には子どもたちの将来のことを話しました。まるでこの世でやり残した仕事を最後に片づけるかのように「一家団欒」を演出していました。子どもたちにとって、買ってきたおみやげよりも何倍か楽しい時間のプレゼントだったと思います。

母子家庭になって以来、本当にいろいろな経験をしました。４０歳近い女の就職は本当にむずかしいものです。「夫が過労死をした」とか、「労災申請中です」と言うだけで、不採用になったこともずいぶんありました。「めんどうな問題を持ちこまれてはたまらない」と経営者は思うのでしょうか。つらい目にあっても、あなたが疲れながらも仕事に取り組んだ姿を思い出し、子どものためにがんばろうと必死でした。髪もチラホラ白くなってきましたよ。冬場の手荒れはひどかったんですよ。でも、働いている手だ、遊んでいない手だ、子どもたちに自慢できる手だと思いました。

お父ざん、あなたが生きた時代は日本にとってどんな時代なのでしょうね。命を、人の生活の営みを、これほど大切にできない日本はひょっとしたら戦争をした時代同様、病んでいるのではないでしょうか。子どもたちが成長し私の手を離れていくとき、いまと同じような社会が彼女たちを待ち受けているのでしょうか。

1991年７月30日、労災の申請をやっと出しました。やっと、です。１年５カ月かかりました。ここまで来るだけで、もうエネルギーを使いはたしたような気がします。これほど暗くて重い宿題をいつまでかかえていなければならないのでしょうか。

お父さん、どこかで私たちを見守ってください。そして、あなたが生きた時代がまちがっていたんだと思えるような未来が来るよう、子どもたちが巣立つころには、いまよりも明るい社会になるよう祈ってください。

お父さん、ありがとう。

＊＊　引用文献　＊＊

『過労死・残された50人の妻たちの手記　日本は幸福か』教育史料出版会
1991年　pp. 10-15より

（ふりがなは、倉橋がつけた）